

令和5年度 杉並区立済美養護学校 学校関係者評価【教職員による自己評価】報告書

＜学校運営協議会委員＞	
・渡邊 貴裕 委員長	・伴 比佐志 校長
・羽山 敏恵 委員	・永田 尚子 委員
・小林 進 委員	・澤村 美智子 委員
・土佐 愛 委員	・岩崎 哲也 委員

学校教育目標	「輝く子ども」 将来、児童・生徒が主体性をもち、豊かな地域生活・社会生活を送れるよう、「自他を認め、社会の中で生きる力と生きる喜びを育む」学校づくりを目指す。
目指す学校像	○安全安心な教育環境を整備し、児童・生徒が自他を認め、主体的に学校生活を送れる学校 ○児童・生徒の多様なニーズに応じ、個別最適な学びや協同的な学びを通して、目標達成に向けた学習指導を充実する学校 ○特別支援教育の専門性を維持・向上し、チームで課題解決できる強い組織づくりを推進する学校 ○保護者・地域・関係諸機関と連携した、地域を愛し、地域に愛される学校

教職員による評価 評価の尺度【4:優れている 3:良い 2:もう少し 1:要改善】

項目		今年度の目標(●重点目標)	具体的な取組の例・評価の観点	肯定率	評定	教職員による主な振り返りとさらに良くしていくための具体的な改善点	学校運営協議会による評価
【安全と安心】	①安心・安全な学習環境の構築	●健康管理・衛生管理の徹底を図り、安心・安全で清潔な学習環境を整備する。	・家庭との連携、情報共有 ・教室の清掃、消毒、換気等の衛生管理	97%	4	・児童・生徒が自分で意識して健康管理や衛生管理をすることは非常に難しい。スキルとして少しでも身に付けていけるよう指導していきたい。 ・隣り合う教室との距離が非常に近く、空き教室が無い中で、児童にとって落ち着いた教室環境を整えることは、教職員による工夫だけでは限界があり非常に難しい環境にある。 ・コロナが5類になり消毒があいまいになった。教室内の清掃、換気等、感染症流行防止のため、健康管理・衛生管理を徹底する。 ・怪我の際に管理職・保健室と情報を共有して保護者への対応や連絡の判断をすることの重要性を感じた。対応方法を学年内で共有していく。 ・教室や廊下の環境整備を徹底し、児童・生徒の転倒やけがを予防する。思わぬことがあることを頭に入れて教具の安全確認に取り込む。 ・保健指導に關して、養護教諭と連携して、児童・生徒に分かりやすい指導を行っていく。 ・発作を持っている児童・生徒についての緊急時の対応をあらかじめ理解しておく。	◇子ども達が自身の健康管理を意識して行うことは難しい。技術として身に付けていく指導がなされていると感じた。 ◇業者による環境測定や安全確認のためのチェックリストを活用し、健康管理・衛生管理、環境整備の徹底に生かしていく。 ◇掃除がきれいに引き届いており、子ども達は楽しそうに過ごし、先生方は元気に、にこやかに挨拶をしてくれる、気持ちの良い学校だと感じている。
			・月1回の各教室、校内施設等の点検 ・教材教具の安全確認	98%	4		
	②安全指導・生活指導の充実	○学校・家庭・教育委員会との十分な連携により、安心・安全かつ安定した医療的ケアの実施体制を構築する。 ●児童・生徒の障害の実態に応じた、安全・安心な給食を提供する。	・養護教諭、教員間で連携した丁寧な健康観察 ・主体性を引き出す、保健指導	98%	4	・医療的ケアについては、学年全体に関わる場面については知れたが、すべてを把握しているわけではなく、校内の取組について理解を深める必要がある。医療的ケアの児童・生徒への対応の仕方等、医療的ケアに関する研修等に参加し、知識を得て理解を深める。 ・今年度、医療的ケアの生徒がおらず、全く関わりがなかった。 ・医療的ケアの実施に当たっては、管理職への迅速な報告と相談を行うことができた。 ・様々なニーズ、ケースがあることを念頭に形態食のあり方を検討する。栄養士・専門家と連携して納得できる給食の提供がお願いできるような協力していく。 ・研修部による全3回の摂食研修の実施することができた。 ・摂食指導についての知識を身に付けていく。 ・スクールバスから降りられない児童に対して、特に時間をとって打ち合せをしているわけではないが、その日の状況に合わせた対応を乗務員と連携して行うことができた。 ・配慮が必要な児童のスクールバス利用に関して、乗務員、保護者、学校が連携を取り、適切な対応をとる。 ・歩行不安定な児童への対応について、安全を重視した指導の徹底を図る。	◇委員会の立ち上げにより、関係する方々は理解を深めているが、その他の先生方については難しいように感じられる。研修を通して先生方全体の学びを深めていってほしい。 ◇地域の医療やボランティアなど、周りの人の力を借りて行っていくことも良いと捉えてほしい。 ◇医ケア、摂食など、特に専門家との連携が大切。更に、充実させていきたい。 ◇よく考えて工夫された美味しい給食が提供されている。 ◇スクールバスの項目が肯定率100%になっていることが素晴らしい。次年度よりGPS対応が可能となり、より便利で安心・安全な登下校を行うことができる。
			・安心・安全な医療的ケアの実施環境の整備 ・校内の医療的ケアへの理解	80%	3		
③人権を尊重する教育の推進	●生活年齢に即した指導と、体罰や不適切な指導のない指導体制を整え、児童・生徒の人権を尊重する教育を施す。	・栄養士や調理員、教員間の連携 ・談話事故・アレルギー事故の防止徹底	94%	3	・いろいろな他者が自分の指導を見たときに、すべての人が肯定的に見てくれるとは自信をもっては言えない。常に冷静に自分の指導を振り返るよう心がけた。 ・特別支援教育に携わるのが初めてだったため、対応の仕方に迷うことがあった。他の教員等と相談するなどしてより良い方法をとれるようにしたい。 ・人権に関して気になることなど学年等でつくばらんに話し合うのが良い。周囲の教員と、児童・生徒情報の共有を図っていく。 ・校内外におけるOJTや人権研修、人権推進委員会により自身の人権感覚や意識の改善を行ってきた。今後は、学年・学部・学校として人権について還元し、児童・生徒の人権を学校全体で共通理解を図るようしていきたい。 ・常に自分自身の言動を振り返るとともに、他の教員からも自分自身の言動を見ていただき助言をいただく。 ・自身の言動については人権尊重の精神で取り組む。自分だけでなく周囲の言動についても目を向ける。 ・児童・生徒の人権を大切にしたい指導・支援ができていくかを常に振り返るようにする。 ・普段の言葉遣いを自身で振り返り、相手が不快に思わないか随時確認し改めていく。 ・人権に配慮した言葉遣いの徹底、組織として人権を守っていく姿勢が大切。複数対応で指導に当たるようになる。	◇人権に関する考え方、感覚が先生方によって温度差があることを感じる。事例を通して考え共有することで、先生方一人ひとりの感覚をすり合わせていくことが大切ではないか。 ◇人権をどのように捉えるかによって、指標の正確さが異なってくる。 ◇「人権」は学校教育目標にある、その子の「生きる喜び」につながるものであるということを経験した上で、子ども達に携わっていく必要がある。意識をもって臨んでほしい。	
		・スクールバス乗務員との連携、情報共有 ・登下校時の安全指導、安全確保の徹底	100%	4			
④防災対策・危機管理体制の構築	●被災に即した避難訓練の計画・実施と、発災時の学校対応の見直しを行う。 ○杉並区防災課等の関係諸機関との連携を十分に図り、組織的な学校の危機管理体制を構築する。	・実災害や事故等を想定した避難訓練、校内環境整備の実施	95%	4	・ここだけではない生徒の避難方法、想定される生徒の行動より細かくシミュレーションしていきたい。 ・生徒たちが落ち着いて訓練に取り組むことができるよう、簡潔な指示出しを心掛ける。 ・生徒の状態によっては、避難訓練に参加できないことがあった。 ・避難訓練の流れや重要点がまだ理解できていないところがあるので実施案の確認をしていく。 ・学校安全計画と避難訓練の事前の資料の読み込み、予習を十分に行う。 ・生活指導部の安全指導や避難訓練の実施案を、昨年度の反省を生かし改善していく。 ・ヒヤリハットや事故の報告、生活指導部への報告・相談の流れを学年内で共有する必要がある。 ・防災等に関して完璧ということはありませんので、防災に関して日常的にもう少し考えておくことは必要だと思う。 ・発災時の対応についての理解を深める。必要な情報がすぐに分かるように掲示したり資料の整理をする。 ・学内の防災については意識を高めて取り組めた。区との連携についてはいろいろな面で不十分なところがあったかもしれない。	◇子ども達の実態として、発災時の急な対応に合わせることは難しい。非常時の中でもできる限り日常的な行動となるように、日頃からの取組が重要となってくる。非常時の対応をどう子ども達に意識付けていくか考えてほしい。 ◇校内での防災対策はもちろん大事だが、地域の人たちの力を借りることで達成できるという視点が出てくると嬉しい。 ◇災害だけでなく、ヒヤリハットも重大な事故につながる。小さなことをそのままにせず大切な事例として扱ってほしい。全体で共有することで、日常的な意識につながっていくと思う。	
		・ヒヤリハットの迅速な周知 ・発災時の対応の理解と連携 ・学校安全計画、防災研修等、組織的活働への取り組み	88%	3			
【授業の充実】	①個別指導計画に基づく学習指導の充実	●区教育委員会に届け出た教育課程を、確実に実施する。	・学びの連続性を意識した年間指導計画 ・学習内容を網羅した学習指導 ・学習指導要領の趣旨を踏まえた学習内容と評価	95%	4	・年間指導計画の見直しと修正を学期ごとに行う。 ・自立活動、遊びの指導、学習指導要領に具体的な内容のないものについての研鑽を継続する。 ・継続して個々の取組を大切にしながら、集団へとつなげていく。 ・学習の内容、目標、手当て等について、集団と個の体制の組み合わせについては、常に大きな課題があると思う。教員間でコンセンサスを得ながら前向きにやっていくしかないだろう。 ・特別支援教育について、まだまだ勉強不足で十分な実態把握や評価ができていないと感じているため、ほかの先生方の授業参観や研修への参加などを通じて力量をつけていきたい。 ・実態把握に即してきめ細かな指導に努める。 ・全職員が外部専門員を活用し、それぞれの教員が特別支援教育の専門性を高めることが重要である。 ・外部専門員の抽出指導を学級担任が一度は見学に行き、情報交換できるとよい。 ・外部専門員の助言をもとに子どもたちの教育活動に生かしていく。 ・担任間の引継ぎに不備があったので、細かく引継ぎを行っていく。 ・保護者の理解や協力がおり、学年のサポートを受け、取り組むことができた。必要なことを踏まえた上で、もう少し緩やかに、伸びやかに心身の健康を保って実施できることが改善点だ。	◇いかに、一人ひとりの実態を把握し、個に応じた指導を実践するために、教員同士、専門家、家庭相互の連携が大切。学びの連続性には子ども達への丁寧なケアが大切になる。
		●外部専門員による各種アセスメントの結果や、学年・学部を通しての連続性のある学習目標の設定を促して、特別支援教育の専門性を十分に発揮し、保護者と連携した根拠のある個別指導計画の作成と適切な評価を行う。	93%	3			
②効果的なICTの利活用	○タブレットや教育用PC、オンライン環境の活用により、学習のポイントが分かる授業の構築を実践する。	・学習活動におけるICTの効果的な導入 ・ICTを活用した学習指導の実践紹介、情報共有	81%	3	・発達年齢によっては必ずしもICTが効果的とは限らない面があり、具体物を使いながらICTとの活用を組み合わせて考えていく。 ・小低の児童にとって操作がしにくい、授業で学習用タブレットPCがフリーズする、iPadとタブレットの互換性が悪いなど、できないなりに活用しようとする傾向が手間や壁となる事柄が多かった。 ・タブレットのセキュリティが厳しすぎて、調べ学習に活用できなかった。制限の中でできることを検討する。 ・学習用タブレットPCだけでなく、iPadや電子黒板を活用した授業づくりに取り組む。 ・子どもたちに分かりやすい写真や音楽、動画を使用していく。 ・学習用タブレットPCはたくさん使用し、授業を行うことができた。パワーポイントをもう少しいこなせるようになりたい。	◇学校としてICTを活用するための研修会を実施することで、先生方の学ぶ意欲に応える必要がある。	

【授業の充実】	③共同学習の充実	○タブレットや教育用PC、オンライン環境の活用により、副籍交流の新たな形を示し、充実を図る。	・ICTやオンライン環境を活用した共同学習、交流活動等の実施	53%	2	<ul style="list-style-type: none"> ・理解の差やできることのある児童によって、課題が大きかった。年間を通して学年の授業の中で取り入れてもらい、2学期後半に一部の児童で実施できた。 ・現在担当している児童に、オンラインを活用した適切な学習活動がイメージできない。発達に合った適切な活用事例を参考にできればと思う。 ・児童の活動の動画などをC4h等で相手校に送れるとよいが容易に厳しい。 ・今後ICTを意識した授業を計画していきたい。オンラインを活用した副籍交流の計画・交流の在り方を探る。 ・今年度については共同・交流にICTを十分活用できなかった。小学部や学校全体の取組や引継ぎなどをしっかり共有し、活用できるような資料等を作成していく。 ・今年度は直接的に関わることがなかった。次年度の課題とした。 ・一部の児童は副籍交流でオンライン環境を十分に活用していた。学年で相談し、交流の取組として考えていく。共同学習や交流学習を今年度は十分に行えなかったため、来年度は多くの児童が行えるような方法を考える。 ・副籍交流は直接交流で行った。相手校や保護者の意向を含めて、今後ICT等を使った交流について考えていく。 ・保護者が一緒に体験することを希望したため、オンラインは行わなかった。保護者の希望を第一に来年度も実施する。 	◇ICT機器を活用した授業やオンラインによる学習活動が実施できたかどうかではなく、子ども達の実態に合わせて効果的な活用ができたかどうか、評価の指標となる。 ◇ICTやオンラインを利用することが当たり前ではなく、子ども達の実態や活動内容に応じて、選択していく段階を迎えている。ICTを活用する考え方が校内で浸透してほしい。
	④生活指導・進路指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> ●児童・生徒が主体的で主体的に学びを深めることを目的とした、主体性の評価について研究を深め、授業実践する。 ○将来の自立に向けた、登下校指導の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・係活動や作業学習等、主体性、自主性を育む教育活動 ・小・中・学部、高等部との連携や連携研修 ・大宮中学校前と学校間の安全な登下校指導や一人通学指導 	85%	3	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい校内研修のスタイルで、中・学部の授業や他学年の授業を学ぶ機会が学年の協力もより達成できた。 ・現在担当している児童の発達段階に応じた内容はある程度実践できていると思う。 ・コロナ以降、小・中・学部の連携や小学部内での交流が十分に行われていない。部運を中心に小学部としてまずどのように進路指導やキャリア教育に系統的に取り組んでいくか話し合っていく。 ・中・学部の行事を見学するなど、交流できる活動を増やし、中・学部との交流をより深められるようにする。 ・登下校指導を学年担任でローテーションすることができた。 ・スクールバスの登下校やバスポイントの様子など、運転手さんや保護者とさらに情報を共有していく。 ・大宮中からの重複・重複学級児童の安全の確保が重要。 ・重度の生徒には難しいのだが、できることを積み重ねていきたい。 ・まずはバスから教室まで一人で行くなど一人通学につなげられるような取組を行う。 ・校外の安全な歩行学習や活動など、まだできることがたくさんあると感じている。場数が少ない。 ・大宮中前からの安全な登下校はできた。校外歩行の時間を活用し、将来の一人通学に向けた指導を行えるようにする。 	◇小学部、中・学部のお子さんが連携したり交流する活動はどのくらいあるのだろうか。ほんの少しでも交流する機会を設け、「年下のお子さんのために」という気持ちや、「憧れのひと」という気持ちなど、他者を意識する心育育成にも期待したい。 ◇小学部と中・学部の接続、中・学部と高等部の接続について、単なる説明ではなく、授業を通して意識を高めたり自分のことを考える機会にしてほしい。
【地域との連携】	①地域への情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ●教育・人権・福祉等の専門家による学校経営の診断を行い、適切な学校運営に結びつける。 ●保護者代表や地域代表による情報収集を通して、保護者や地域とのニーズに即した情報の発信を促進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会への理解、意見交換・情報共有 ・学校行事や学習活動等を通した、PTA・地域との連携と情報発信 	80%	3	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会の方と直接お会いする機会がなかったため、次年度以降そのような機会があれば意見交換等を行う。 ・プリントなどで確認するだけで、直接関わることができなかった。機会があれば関わりたい。 ・尽力してくださった先生方がいることは知っているが、自身は関わっていなかった。 ・関係の方々も直接やり取りをする場面がなかった。 ・受け身にならざるを得ないと感じている。積極的に関わられる部分が少ない。いかにともしがたいと感じている。 ・積極的に学校運営協議会やPTAの方々の考えに触れる機会をもつ。 ・連携行事への参加を通して地域とのつながりを深める。 	◇学校運営協議会は地域資源の代表が集まっている組織で、いろいろな立場の方々がいる。委員の先生方と関わることは、地域と関わる、向き合うということ。交流を深め、一緒に考えていきたい。 ◇済美養護学校は杉並区全域を地域としていることを、意識的に考えなければならない。地域をどのように捉えるかがこれからの課題といえる。 ◇病院、大学、企業、ボランティア等、地域には様々な資源があり、チャンスが広がっている。いかに学校の外に目を向け、いろいろな人とつながることが重要となる。 ◇学校近辺以外の地域にも障害のある方がお世話になっている作業所等が多々あり、卒業生が通所している。そういうところとも交流をもち、情報共有したり、懇談したりできると良い。
	②センター的機能の実行	<ul style="list-style-type: none"> ●地域指定校や交流校、都立特別支援学校高等部との連携を行い、児童・生徒の交流活動や進路指導を充実させる。 ○地域指定校と連携し、副籍交流及び共同学習を推進する。 ○学童や放課後等ディサービス事業所と十分な連携を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業学習の成果物を介しての交流 ・近隣小・中学校との交流、行事への参加 ・地域指定校との連携、情報共有による、着実な共同活動の実施 ・コーディネーターとの確実な情報共有による、地域関係機関との連携 ・迅速な対応による、必要な情報発信と情報提供 	85%	3	<ul style="list-style-type: none"> ・作業販売において、保護者の方々と交流することができた。今後も保護者との交流ができる教育活動を行ってきたい。 ・副籍交流の計画をより早く保護者提案する。 ・地域指定校や学童等との連携の大切さをよく理解し、情報共有に努める。 ・地域指定校における相手校担任等へのレクチャーや情報提供等が十分にできなかったため、学級担任やコーディネーターと協力し、インクルーシブ教育に貢献していきたい。 ・お互いの行事の参観など近隣の学校との交流を積極的に行っている。 ・相手校から学校だより等が滞ることがあったので、C4h等を活用し、こまめに連絡を取り合う。 ・放デイ、家庭と情報を共有し支援方法を考えた。また学校での実践を伝えていく。 ・放デイ等で引き渡しの際、生徒の体調や表情を一緒に確認している。 ・学童や放デイとの連携について保護者からの要望があったものの担任が参加するまでに時間がかかった。連携の手順を明確にする。 ・学校全体としてはできているのだと思う。自分ができる場面で協力していきたい。 	◇先生方に対して、地域担当・PTA担当と交流したり、就業時間内に地域行事に参加したりできるような配慮が必要になるのでは。 ◇PTAには動いている方々がいる、集まる機会が中々つづれない。地域を広げすぎると負担感につながってしまう。また、支援学級やその設置校、その他の学校など、教員や保護者の理解度や考え方が違うことを感じる。地域の協力を得ながらということはとても良いのだが、オープンに関われるかという様々である。関わる場やつながり方等、具体的な方向性が提示されると協力しやすい。 ◇地域への発信も大切だが、もともと地域から歩み寄っていただく機会があればよい。 ◇地域との関わりについて、保護者に負担がからないようにする。済美養護学校の取組に軸足を置き、地域が学校に向くような仕掛けを学校が施していく。例えば、出前授業や図書時間の読み聞かせの授業など。ハードルが低い授業から徐々に、副籍校とのコミュニケーションがとれていると保護者が意見を言いやすい。実践を積み重ねて、学校間の交流の良さが感じられるようになる。
	①円滑な業務遂行	●ライン業務の遂行と職責に応じた職責の明確化を行い、学校課題に組織的に取り組むシステムを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> ・職責、職責に応じた「報・連・相」の徹底 ・課題解決における初期対応の重視 ・学部、学年での組織的な対応 	89%	3	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な業務分担で、仕事の振り分けを行う。 ・会議がスリムになったことがあった。 ・医療的ケアや摂食指導における「報・連・相」をメールにてこまめに行う。 ・今年度は学部や学年の連携は、効率を考えれば概ね良くなってきていると思う。異動のスパンが機械的になっており、様々な引継ぎ、指導観の共通理解には多大な努力が必要である。 ・視野を広くもち、問題や課題を未然に防げるようにするとともに、学年で組織的な対応を行っている。 ・一人で問題を抱え込まずしっかりと相談する。 ・次年度も教員間でしっかりコミュニケーションをとる。 ・学年で協力して日々の業務をすすめることができた。 ・学年以外の授業を見学できるように体制を組めるとよい。 	◇夕方、学校を覗くと、先生方が大変熱心に協議をしている姿が見られた。打ち合わせを念入りに行っている。その中で学ぶこと、伝えることなどが自然に成立している印象を受ける。時間のない中であるが、先生の連携している姿に、敬意を表します。教師経験と年齢層が比例していない時代である。年齢が高い未経験の初任者という状況も考えられる。世代間の相違も大きいですが、日々の業務分担の中で意思疎通ができるよう期待している。
	②指導力・専門性の向上	●小集団グループによる、意図的・計画的な専門性向上のための研修実施や、学び合いを意識した実践的なOJTを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・全校研修会、校内研修等による、専門性の向上 ・学び合いを意識した実践的なOJT ・主体性を育てる授業実践 	92%	3	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修の進め方がとてもよかった。学期に1回は授業を参観するなど、次年度も学部学年を越えて授業を見合う機会をもつ。 ・授業を見に行く機会が得られたことは良かった。来年度は今年度より授業を身に行ける機会を増やす。 ・メンバー全員がイメージを共有し実践に生かせるように取り組んでいきたい。 ・全体の年間を通した流れを早めに理解して動いていく。自ら研修に参加し、学びを深めていく。 ・本年はもっと自主的な研究が進められると思うが、コロナ禍以降、研究はこもこも下火になっているので多少周囲の高まりを見守りたいと思う。 ・学年内での各教科の意見交換を心掛ける。 ・主体性についてさらに考えていき、児童・生徒が自ら学ぶ姿勢を構築できるよう実践を積み重ねる。 ・生徒の主体性を引き出す言葉掛けや教材を模索し、生徒の主体性をより高めていく。 	◇ベテラン教員、中堅教員、若手教員が学部を越えて学び合うことができている。話し合いが気軽にできる雰囲気ができている。この研修スタイルを継続することで、小さな輪同士が重なり合い、やがて大きな輪へと広がってほしい。
【組織力の向上】	③服務事故ゼロ	●教員の業務分担の適正化や業務軽減により、余裕を持って職務遂行できるように、働き方改革を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ・効率的、計画的な業務の実施 ・働き方改革を意識した、業務改善の実践 	80%	3	<ul style="list-style-type: none"> ・業務を適切に割り振るよう努め、特定の教員に負担がかからないようにしていく。 ・業務に偏りが見られる。毎年同じ教員に対して業務が多くなっており、同じ職員の教員でも職責が少ない。学年(小学部)によって、勤務時数が異なる。時数の平均化。 ・行事における業務分担にどうしても偏りが出る。学年運営を考えた分担は毎年考える必要がある。 ・今年度は業務分担や組織の系統を理解するのに時間がかかった。来年度はもう少しスムーズにできるようにしたい。 ・今年度組織人も大きく変わり、全体で十分な共通理解を掴めないことがあった。まずは学年が分掌の係を中心しっかりと共通理解を回り、学年・学部間の横のつながりを強固にしながら学校全体の職務や学校運営に関する意識を高めていく。 ・個人情報の不適切な取り扱いを防ぐためにも、大切な個人情報の書類等は学年間できちんと共有し、十分な管理のもとに保管や提出等を行ってきたい。 	◇社会人として、組織人として、服務事故は起こしてはならないという風土がどの程度醸成されているか、次年度見ていきたい。
			<ul style="list-style-type: none"> ・サービス事故ゼロ、個人情報の管理徹底 	97%	4	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報の不適切な取り扱いを防ぐためにも、大切な個人情報の書類等は学年間できちんと共有し、十分な管理のもとに保管や提出等を行ってきたい。 ・いろいろな業務の担当や責任者、リーダーを「前回担当していた」ではなく引継ぎデータやファイルをもとに、新規の方も積極的に担っていただけるような意識をもつ。誰もが、「引継ぎデータや資料があるのなら職務は遂行できる」という意識をもつ。 ・次に引き継ぐ人が何をどうしたらよいのか分かるように努めた。 ・データによる会議記録、引き継ぎを推進する。 	
	○担当する業務の意味や目的を明確化し、新しい施策に全教職員が積極的に参画できるような学校運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・各会議、分掌・委員会における課題の共有と役割の明確化 ・起案文書の作成、閲覧意思決定 	93%	3			